



TITLE:

宇宙を観る, 人生を観る : 卷頭隨筆

AUTHOR(S):

山本, 一清

---

CITATION:

山本, 一清. 宇宙を観る, 人生を観る : 卷頭隨筆. 天界 1940, 20(232): 289-291

ISSUE DATE:

1940-08-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168050>

RIGHT:



第232號 (第 20 卷)

(昭和15年) 8 月 號

卷頭

## 宇宙を觀る，人生を觀る

隨筆

山 本 一 清

六月の末の或る日曜日の午後，最近に到着した大英天文協會雜誌を見ると，何ヶ月も以前からの“天秤星座”に関する論議がまだ續いてゐる。そこで，自分もつい釣り込まれて，之れに關係ある種々の書物や論文類を読み直し，あさり續けた。こうして，暫くは，世の中の雑事を忘れて，いろ々々と空想に耽ること，天文家の楽しみである。

そも々々此の天秤星座に関する話題は，大英天文協會雜誌の本年度の二月號に質疑應答として現はれたものである。初めの質問は，無名氏から發せられたもので，“度々聞く所によれば，天秤即ち「はかり」の星座は昔しは蝸座の挟みであつたさうで，例へば，其れは，フラムスチードの作つた星圖にも，蛇遣ひや蛇座の挿畫の中に表はされてゐます。して見ると，天秤星座といふのは，誰が何時の時代に發明したものでせうか？ 尙ほ，ついでに，他にも，そんな例があつて，黄道の星座が10個とか，11個とかいふ事は無かつたのでせうか？”といふのであつた。之れに對して，A. S. D. Maunder 夫人が答へてゐられるが，其の要旨は，下の通りである。即ち：

ギリシャの昔，詩人 Aratos が書いた Phaenomena (天象詩)の中には星座が47個記されてある。(このアラトスの天象詩のプリンス氏散文英譯は，本誌“天界”大正15年度の第61號から第67號にわたつて掲載してある。)此等の星座はアラトスが“或る先住民族”と稱する大昔しの天文家たちによつて作られたもので，多分この民族は歐洲に於いて北緯37°乃至38°あたり，即ち地中海の岸邊に住んでゐたものらしい。時代は學歴紀元前およそ2900年前(2800年乃至3000年)である。この先住民族は，此等の星座を作る以前に，既に天文のことを可なりよく知つてゐたらしく，春分や秋分，夏至や冬至は言ふに及ばず，赤道も，黄道も，陰陽曆なども知つてゐたらしい。一ケ年が12ヶ月(時々閏月を加へて，13ヶ月となるが)であるから，彼等の黄道には12星座が置かれただらう。當時は，又，春秋の分點や，夏冬の兩至點に丁度明るい星があつ

た。即ち、春分點にはアルデバラン星が、夏至點にはレグルス星が、秋分點にはアンタレス星が、冬至點にはフomalホ1ト星が近かつた。此等の4星は皆一等星で、相互にほど 90°づつ離れてゐたので、四季を表徴する星として貴まれ、Royal Stars とさへ呼ばれた。今の天秤座星を、アラ1ストは“蝸の兩爪”と呼んでゐるが、之れが例の先住民族の名づけた最初の稱呼であらう。ところが、太陽が此の“蝸の爪”のあたりに來た頃に晝夜が平分したので、遂には此の星座が獨立して“天秤”と呼ばれるやうになつたのだらうが、之れは、しかし、明らかに、“先住民族”の時代でなくて、ほど紀元前700年の頃である。因みに、黄道星座が10個や11個であつたとは考へられない。云々。

このモ1ング夫人の解説文に對する Duncan MacNaughton 氏の批評が同誌の本年三月號に“蝸の爪と天秤”と題する寄書になつて現はれた。この意見に據ると、Zodiac (黄道、獸帶) といふ言葉を最初に使つたのはギリシヤの Oenipodes (Anaxagoras と同時代で、紀元前 500—428 年頃、Chios 島に住む) で、之れは春分點から黄道を12等分したものであつた。この(第五世紀)以前には、バビロニヤ人が、曆法研究上、黄道の一部に名づけた名がある。之れは例へば、Mashtaba (双子)、Urgula (獅子)、Zibanitum (蝸の爪) 等であつて、大體、紀元前2900年頃に用ゐられたが、しかし、此の大昔に、バビロニヤ人が黄道を12等分した方式を用ゐてゐたか否かは不明である。モ1ング夫人は、“Libra” (天秤) の名が紀元前700年前の頃に作られただらうと述べてゐるが、ギリシヤ人は天文學をバビロニヤとエジプトから學んだことは周知の事實である。しかるに、バビロニヤには“天秤”の記録は全く無い。之れに反して、エジプトでは天秤は早い時代から知られてゐた證據がある。Sir W. Peck 氏によれば、エジプトでは、“春の穂の星”即ちスピカ星が夕刻に東から上つて來る頃(春分の頃)に曆の上で新年を迎え、其の次ぎの“天秤”星座は、收穫を星や收支の計算の表徴であつたといふ。云々

ところが、このマクノ1トン氏の古代エジプト説に對して、手厳しい批判をしたのが、同誌五月號に現はれた Herbert Chatley 氏の“古代エジプト天文學”といふ寄書である。このチャトリ氏の説によれば、前記マクノ1トン氏の意見は、近代のエジプト天文學上の研究と全く一致しないといふのであつて、エジプトにはトレミ1王朝以前(紀元前300年以前)には、黄道十二宮の記録が全く見當らない。例へば、Edfu 市にある最古のトレミ1王朝時代の寺院が、紀元前 230 年に建築し始められ、同57年に落成した。ところが、此の寺院には可なり完全な天文學的裝飾が施されてあるに拘らず、黄道十二宮は見當らない。もつと後代の、紀元前後に作られた Denderah や Esneh や Erment の寺院や、Athribis の墳墓に、初めて十二宮の畫が現はれてゐる。云々。尙ほ、エジ

プトの暦法で、一年を365日とする標準暦は、マクノートン氏は比較的后代のことだとしてゐるが、之れは怪しい。むしろ、エジプトの第五第六王朝時代に此の暦法の記載があり、又、第6王朝の Pepi 第二世のピラミッド文書中にも明瞭に5祭日の記録がある。多くのエジプト學者は、此の365ケ日の標準暦法を、むしろ王朝以前と見てゐる。

尙ほ、今後、どんな意見が同誌上に發表されるか、判らないけれど、しかし、大體に於いて、“天秤星座”なるものは、パロビン以來、永く“蝸座”の一部のやうに取り扱はれ、獨立したのは比較的后代であることだけは疑ひないやうである。

上に書いたエジプトの“トレミ1王朝”といふのは、紀元前323年にアレキサンダ大王が死して後に起つた Ptolemy 第一世 (Soter) 以後、クレオパトラ女王(前30年死)に至るまで、前後293ケ年間を言ふのであるが、此の間に15代の王が交代してゐる。天文史上には、ギリシャ天文學の完成者として Claudius Ptolemy といふ大學者があるが、之れとエジプト王とは別人である。尙ほ、このトレミ1王朝の人物中、多少でも天文に関連するのは、トレミ1第三世 (Euergetes, 紀元前246—221年治世) の王妃 Berenice であらう。今も尙ほ吾々が用ゐてゐる星座の中に Coma Berenices (ベレニスの髪) といふのがあるが、之れは王妃ベレニスがトレミ1王のシリア遠征の戦勝を神かけて祈つて、Zephyrium の Arsinoë Aphrodite 神に記念として捧げた髪であると傳へられ、神殿中から此の髪が盗まれたので、サモス島の天文學者 Conon が、天空を指して、星座中に此の“髪”を見出したといふことになつてゐる。

黄道に12ケ月の星座が列ぶやうになつた以前に、只の6ケの星座がパロビンによつて認められてゐたことが一般に信ぜられてゐる。其れは、“牛”と“蟹”と“乙女”と“蝸”と“山羊”と“魚”とであつたといふ。

---

### 歐洲戰亂中の天文學

戦争のため、書物や研究報告書は來ないし、諸所の學會も休日の状態である。只、今日、觀測をし得る微妙な地位にあるのは(日本やアメリカのほかは)、ベルギーと、ロシアと、イタリアのみといふ有様に、初めの間は見えた。しかるに、戦争も半年たつて、激しい戦闘が國內に展開しない様子に多少安心したもののか？ドイツあたりでも、やはりかなり良い觀測や研究をやつてゐるし、諸報告や、書物なども出してゐる。英佛あたりも亦此の點に於いて負けてゐない。不思議と言へば、不思議な戦争である。